

モリス・ダンスをめぐって

松 本 達 郎

創立期の獨協大学には、個性的で活きのいい学生が揃っていた。私は私立高校で英語を教えながら六年がかりでやっと博士課程を終え、真新しい大学の専任講師になったばかりだった。その私が担当した現代英詩のゼミには、とりわけ型破りな人柄の若者が集まった。時はまさに「学園紛争」の嵐の前夜で、獨協大学の学生の中にも、新旧の「左翼」の「セクト」に加担して、ヘルメットを被り、「ゲバ棒」と呼ばれる角材を掴み、学内外での「武闘」に参加したがる者が多かった。獨協に限らず一般の「左翼」学生の大半は、闇雲に「改革」を求める情熱を持ちながら、翻訳されたマルクス主義の教科書からの抜き書きと、任侠映画の殺し科白より他の語彙を持たないため、自分の情熱に本来の美しさを、自分の言葉で裏切り汚していると私は思った。私は自分のゼミの学生たちには、美しい言葉を使う実践をして貰いたく、また左翼学生の言う「大衆の支持」など全く得られない、政府がその気になれば容赦なく鎮圧される「武闘」などで、心身に生涯に及ぶ傷を負わせたくなかった。そこで私は苦し紛れに「美意識の改革は体制の改革に先立つ。大衆の美意識改革を訴える手近な手段は演劇だ。俺たちは演劇で革命を目指して闘争しよう」と呼びかけると、ゼミの全員が乗ってくれた。その後のほぼ二年間、「学園紛争」が激しくなる中で、獨協大学英語学科松本ゼミの学生諸君は、学内外での演劇上演に没頭し、闘争に忙しい左翼学生たちから「ノンセクト・ラディカル」をもじって「ナンセンス・ドジカル」と揶揄されながら芝居の稽古に励んだ。旗揚げ興業が学内の大教室でやったディラン・トマスの『アンダー・ミルク・ウッド』で、最も大掛かりなのが御徒町のとある会館のホールを借りたソフォクレスの『オイディプス』だった。その『ミルク・ウッド』で目の見えない老船長キャプテン・キャット

の役を、『オイディプス』でこれまた目の見えない予言者ティレーシアスを熱演したS君は、役に狂って鬼気迫る演技の出来る名優だった。普段から感奮が真っ直ぐに体に出てしまう人柄で、ゼミに入って間もない頃の夏合宿でのこと、一同がキャンプファイアーまがいを囲んで談笑している時、突然両の踝に鈴をつけて踊り出し、楽しさを盛り上げてくれたことがあった。私はS君が大学に来る前に、長くボーイスカウトに加わっていたと聞いていたので、その踊りがスカウト仕込みだろうと思っただけで、由来を調べてみようとは思わなかった。

それから二十年以上も経って、私がウェールズでサバティカル・イヤーを楽しんでいたある春のこと、アベラストウイスの町外れの空地で、両足首に鈴をつけて踊りの練習をしている若者を見かけた。「ボーイスカウトの踊りかい」と訊くと、一瞬こちらの無知を軽蔑する表情を見せて、「モリスですよ。今度のメイポール祭りで踊るんです」と言った。私は一寸好奇心を惹かれたけれど、他の用事にかまけてメイポール祭りを見に行かず、悔いを千載に残すことになった。当時はウェールズのナショナリズムが最後の燃え上がりを見せていて、十八世紀のメソディスト信仰復興運動以来長く禁圧されていた、異教の匂いのする昔の民俗行事を甦らせようという色々な運動が盛んだった。その一つにトゥンパス・ダウンス (twmpath dawns = 塚の踊り) と呼ばれる、日本の盆踊りを思わせる古い踊りの復活を目的とした集いがあり、私は前年の晩秋からクリスマスにかけて、至る所のトゥンパス・ダウンス講習会に参加して踊りを習った。私がそこで得た印象は、講習会に集まる人々は、地方の学校の先生で故事研究者らしい指導者が、ウェールズ語でかける号令に従って動くことだけで感動し陶醉して、踊りや音楽の真正さには関心がないということだった。全員が輪を描いて踊る形と、向き合った二列で踊る形の二種類があり、細かな違いはあっても結局は四拍子系の八拍に纏められる音楽に乗る踊りは、私が日本で体験したイギリスやオランダ系のフォークダンスと変わりなく、これ以上ウェールズの民俗舞踊に付き合う気力を無くしていた。そして恐らくは紛い物らしいメイポール祭だろうが何だろうが、モリス・ダンスが実地に踊られるのを見る機会を永遠に逃してしまった。

昭和が平成に変わる頃、私は新設の姫路獨協大学に籍を移して英語学科のゼミを開いた。ここでも創立期の学生は十分に個性的で生気が溢れていたが、関西（大阪を除く）文化の慎み深さが邪魔をして、演劇に乗って来そうなゼミ生

は乏しかった。それでも大学祭に当っては、何か変わった模擬店を開きたいと言うので、少し前に私の家に転がり込んで日本を見る足場にしたウェールズ人の若者から教わったピケバハアラムン (pice bach ar y maen: 本来は暖炉の中に張り出された石の上で焼く小さなクッキーだが、pice という語は辞書に出ていない。その青年が育った環境の方言かも知れない) の作り方を学生たちに伝授し、「ウェルシュ・ケーキ」と看板を出した模擬店を開かせて、客寄せのために店の前でバイオリン (より正確にはフィドル) を弾いてやった。専らロビン・ウィリアムスンというアメリカのフィドル奏者が出した民俗舞踊曲集 (Robin Williamson, *English, Welsh, Scottish & Irish Fiddle Tunes*, Oak Publications, 1976) にある曲で、それまではただ楽譜を辿って楽しむだけだったのだが、今回は律儀な学生から曲の由来などを質問されても困らないようにと、曲に付いている説明文を初めて読んで驚いた。それまで日本で出たいろんな「イギリス民謡集」に「メイポールの歌」として出ている歌が、「ステインズ・モリス」(Staines Morris) という「宮廷風モリス・ダンス」の曲であり、印刷された最古の楽譜が1595年のリュート曲集にあること、モリス・ダンスは多くの地方で独自の踊りや曲を発展させたが、この曲はテムズ河畔に実在の町ステインズでは知られていず、恐らく人名に因む曲名だろうと書いてある。「宮廷風モリス・ダンス」という言葉が、私には意外だった。「モリス・ダンス」を辞書で引くと、英米系の辞書では大抵、「イングランドのメイポール祭などで行われる屋外の仮装舞踊で、ロビン・フッドなどの民話に出て来る人物に扮した男たちが衣装に鈴をつけて踊る」といった説明をしている。私はかなり野卑な民俗舞踊を想像していたのだが、「宮廷風」があるとなるとモリスは一種類ではないらしいし、「参加」する踊りなのか「見る」踊りなのかも怪しくなってくる。調べてみようと思ふとダンスに関するあれこれの本を読んだが、モリスの事は書いてなかった。リンカン・カースティンの古典的名著でバレエの歴史が納得出来たのは収穫だったが、文字で記録出来ない「踊る」体の動きが読めないのが、当然のことながら、やはりもどかしい思いがあった。

モリスに関係がありそうな情報のつまみ食いをしているうちに、妙な事に気が付いた。古代のイスラエル人が鈴を使って踊ったと書いている人がいるので、私が昔プロテスタントのミッション・スクールで中学生だった時に使った文語訳の旧約聖書を引っ張り出し、コンコルダンスを頼りに「踊り」「踊る」とい

う言葉のある章句を全部当ってみた。するとサムエル後書6章5節に「ダビデおよびイスラエルの全家、琴と瑟と鼓と鈴と鏡鉢をもちて、力を極め歌をうたひてエホバの前に踊れり（句読点を入れ、若干の漢字を簡略化した）」と書いてあり、この部分は1955年の口語訳聖書にも「ダビデとイスラエルの全家は琴と立琴と手鼓と鈴とシンバルとをもって歌をうたい、力をきわめて、主の前に踊った」と訳されている。だが身体や衣装に鈴を「付けて」踊ったとは書いてない。念のために共同訳が出来る以前のカトリック訳の聖書を見ると「ダヴィドとイスラエルの家はすべて、全力をつくして、歌とチタラ、豎琴と小太鼓、三弦琴とシンバルをもって、主のみまえで祝った」とあり、鈴も踊りも出て来ない。最後に共同訳の聖書を開いてみると、ここは「ダビデとイスラエルの家は皆、主の御前で糸杉の楽器、豎琴、琴、太鼓、鈴、シンバルを奏でた」となっていて、「鈴」が生かされ「踊り」が消されている。翻訳の正確さを期してというよりも、カトリックとプロテスタントがお互いの面子を立てて譲り合った翻訳だと勘繰りたくなる。なお、ジェームズ一世の欽定訳聖書では、この部分は“*And David and all the house of Israel played before the Lord on all the manner of instruments made of fir wood, even on harps, and on psalteries, and on timbrels, and on cornets, and on cymbals.*”で、鈴も無ければ踊りも無く、代わりにコルネットが入っている。私はヘブライ語が読めないし、古今東西の読める人々が考えても一致しないのだから正解は求めないけれど、ともかくモリス・ダンスの遠い先祖を旧約時代のイスラエルに探し出すのは無理だと思った。

モリス・ダンス (morris dance) という言葉は Moorish dance (ムーア風の踊り) が訛ったものだ、と大抵の英語辞書に載っている。それに間違いはないだろうと思いつつ、わざと臍を曲げて、Morris という人名と関係がないかを探してみた。意外にもこの名前はやはり Moorish に由来するもので、色黒の人をこう呼んだのが固有名詞化したのだという。昔のヨーロッパで、民俗行事の元祖にされそうな偉人と言えば聖者だろうと見当をつけ、あれこれの聖者伝をめくっていると、綴りは違うがモリス系の名を持つ人に聖モリス (St. Maurice) がいた。

ヤコブス・デ・ウオラギネの『黄金伝説』によると、古代ローマでディオクレティアヌスとマクシミアヌスがそれぞれ東西の皇帝だった頃、エジプトのテーバイで「一般にテーバイ人軍団と呼ばれるキリスト教徒の軍団の指揮官」を勤めるマウリティウス (Mauritius) という軍人がいた。皇帝たちは「ローマ

の命令に背き、ローマの法に楯をつくような愚かな」民を絶滅するために軍を起し、西帝マクシミアヌスはテーバイ人軍団を含む大軍を率いてガリアに向かった。全軍がアルプスを越え、今のスイスのヴァレ（Valais）地方に着くと、皇帝は麾下の全ての兵士にローマの神々に燔祭を捧げることを強要し、これを拒んだテーバイ人軍団の兵士十人に一人を見せしめに斬首して脅し、それでも従わなければさらに十人に一人の首を切った。兵士たちは皆、軍団長マウリティウスの殉教への励ましに従って何の抵抗もせず喜んで死ぬので、業を煮やした皇帝は全軍に命じてテーバイ軍団を包囲させ、皆殺しにして軍馬に踏みこじらせた。キリスト教紀元 287 年のことだとされ、聖者事典の類には普通 St. Maurice-en-Valais として、もう少し史実を探った説明が載っている。いつ列聖されたのかは私には判らない。今もバチカンの教皇庁にいる「スイス衛兵」の守護聖徒で、古くはイギリスにも聖モリスに捧げられた教会が八箇所にあったらしいが、私にはどうもこの聖者の性格と、私が聞き知っているスイスという土地柄とを重ねると、モリス・ダンスのようなふざけた騒ぎを伴うカルトが生まれそうではないと思われて、追及を諦めてしまった。そのうちスイスの「サン・モリッツ」で冬季オリンピックが開かれた。Moritz は Morris/Maurice のドイツ語形だが、ヴァレのサン・モリスと同じなのかどうか確かめる気力を私は失くしていた。

インド洋はマダガスカルの東に浮かぶ、私たちの世代にはひどく懐かしいサン・ピエールの『ポールとヴィルジニー』の島は、かつてフランス領だった時にはイル・ド・フランスと呼ばれ、別名をイル・ド・モリス（Ile de Maurice）と言った。イギリスが統治するようになって、何故かモリスをラテン語形の Mauritius に変え、英語風にモーリシャスと読む事にした。今はその名前で独立国になっている。十九世紀イギリスのお偉方の銜学趣味が窺われて微笑ましい。なお、私は見たことがないが、古い時代の美術作品では、聖モリスは黒人の歩兵将校の姿に描かれているという。上部エジプトにヌビア人を想うのは、中世ヨーロッパでは当然のことだったに違いない。

英語の辞書で POD と COD を引くと、今は Pay on delivery; Cash on delivery としか出て来ない。昔はそれぞれ Pocket Oxford Dictionary; Concise Oxford Dictionary で、増補改訂が重なるうちに『ポケット』の方はロシア兵の外套のポケットにしか入らない大きさになり、『コンサイス』の方は大辞典並みの厚

さになって、いつか日本の書店の棚から消えてしまった。私の学生時代には、漢学者の風格のある鹿爪らしい先生から、英語を勉強する学生はすべからず『コンサイス』を自在に活用せよと訓示され、私も古本屋で真新しいのを一冊買ったが活用する語学力は無かった。友人たちは皆、自在に活用している様子なので、鹿爪らしくない先生に悩みを打ち明けると、「昼寝の枕に活用するんだ」と一笑された。

その『コンサイス』の基になった OED (Oxford English Dictionary) の、拡大鏡で読む二冊本の縮小版を買ったのは、ウェールズ研究に身を入れ始めてドレイトン (Michael Drayton, 1563-1631) の *Polyolbion* を読んでみようと思ったからで、これは未だに果たせていない。OED で *morris dance* を引いてみると、文献には 1485 年に "moreys dauns" の形で初出していて、フランドル語の "mooriske dans" が直接の先祖だろうと書いてある。この事と、1988 年に出た小学館の『仏和大辞典』の *mauresque* の項の説明の中に、「モレスカ：スペインのムーア人によってヨーロッパに輸入され、ルネサンス期に大流行した舞曲」とあるのが、そのうち次第に、かつ大いに気になり出した。

「ムーア人の踊り」をスペイン語で言えば *danza mora* だが、日本のフラメンコの黎明期には真先にギターの音楽が輸入され、アメリカで活躍していたサビーカスやカルロス・モントーヤの、幾分ジャズっぽい味付けのある華麗で猛烈な演奏の LP レコードを、これが本当のフラメンコという物かとファンは神妙な面持ちで聴いていた。サビーカスもモントーヤも演目の中に「ダンサ・モエラ」を入れていた。

その頃私は安物のギターの胴面をサンドペーパーで擦って薄くし、学用品の下敷きを切ってゴルペ板を貼った手製の楽器でフラメンコを独習していたが、ある冬の夕暮れ、日本で恐らく最初の「フラメンコ・ギター曲集」を出した勝田保世（しょうだ・ほせ）さんを新宿の自室に訪れて話を聞く機会に恵まれた。保世さんは若き日にオペラ歌手を目指してイタリアに留学したのだが、偶然その地で当時「ジブシー」と呼ばれていたロマのフラメンコを聴き、たちまち取り憑かれてしまってスペインに渡り、アンダルシアを放浪してギターを習ったと言った。そして自分のギターは決して上手くはないと謙遜しながら、爪弾きと幾分枯れたテナーでソレアを一曲聞かせてくれた。陶醉している素人の私に、保世さんはいたわるような口振りで「本物のフラメンコを弾きたいなら、サビーカスやモントーヤの真似をしないで、メルチョール・デ・マルチャーナのリコー

ドをコピーしなさい」と薦めた。私が好きなニーニョ・リカルドはどうかと訊くと、「彼も良いけれど、絶対に真似は出来ないよ」と言って笑った。私がその後買い集めた、保世さんが薦めるスペイン在住のギタリストたちのレコードには、ダンサ・モーラは一曲も入っていなかった。

1970年代が終る頃、私は日本の「スペイン舞踊」の元祖と仰がれた河上鈴子「先生」が、踝に鈴を付けてダンサ・モーラの曲を踊る舞台を見た。しゃがんだ姿勢のままで跳躍を繰り返す激しい踊りに圧倒されたが、河上先生ぐらいの大家になると自分の好き勝手に踊りを作るのは当たり前だろうから、これが真正のダンサ・モーラだとは信じられなかった。それ以後は日本でもスペインでも、ダンサ・モーラを踊る舞台を見たことがない。

その頃は「フラメンコ」(flamenco)の語源について、随分と怪しげな諸説が飛び交っていた。アメリカ人で緑色のギターを抱えてアンダルシアを放浪し、現地の人々にも珍重されたと自慢するフラメンコ愛好家デイヴィッド・ポーレンは、英語で書いたフラメンコ案内の本に、この言葉の源を求めて「フェラムング」というアラビア語に辿り着いたなどと言っていた。私自身はスペイン語でフラミンゴのことも「フラメンコ」と言うので、この言葉には何かしら赤く燃え上がる物を想い浮かべていた。

昔の「英文科」学生の必読書の一つとして薦められていた本に、ケア教授(William Paton Ker, 1855-1923)の『叙事詩とロマンス』(*Epic and Romance*, 1896)があった。私自身の学生時代には、図書館にはあってももう町の書店で買える本ではなかったが、同じ大学の英文科の先輩だった私の父が持っていて、自分は通読していないのに、私の入学の時、これはぜひ読めと押し付けた。この本の最後の部分でケア教授は、クレチアン・ド・トロワの流れを汲む中世ロマンスの終末期の傑作として、プロヴァンス語で書かれた物語詩『フラメンカ』(*Flamenca*)を紹介し、『薔薇物語』と同時期に書かれながら、宮廷恋愛ロマンスの魔術的で超自然な道具立てを一切使わず、嫉妬深い夫とその妻と色男との三角関係を、市井の現実の出来事として見事に描き出した作品だと褒めている。

ケア教授は『フラメンカ』が突然変異で、後の世代に影響を残さなかったと言っている。私はプロヴァンス語を知らないけれど、総じてロマンス語ではflam-に「炎」の意味がある。評判の文学作品が民間の風俗に採り入れられるのはよくある事で、炎の情熱を燃やす女を挟む二人の男の駆け引きが民俗舞踊

に仕組まれて、「フラメンカ（風）」と呼ばれたのではないかと考えてみた。だがこれはヨーロッパに「ムーア風ダンス」が流行より前の作品だし、鈴が出て来る話でもないから、仮に「フラメンコ」の語源だったとしても、モリスとの関連は諦めるしかなかった。

語源の点でもっと見込みがあるのは、一流の言語学者でもあったメリメの『カルメン』で、この小説の中に主人公のロマ女が、自分は“Flamenca de Roma”だと啖呵をきる場面がある。工藤庸子さんの邦訳では「ロマのフランドル娘」となっているが、私が昔読んだ本のうちには、確か「生粋のフラメンカ・ロマーニー」と訳したのがあって、その方がカルメンという女の息遣いには近かったように思う。“flamenco/-ca”はスペイン語でフランドルを言う Flandes の形容詞形で、メリメが活躍したナポレオン戦役直後の時代には、勘定高い現実主義者の国オランダがフランドルを併合し、住民を生真面目な俗物へと教化していた。怪しげないかさま稼業で口過ぎをする流浪のロマにとって、フランドルは居づらい土地になり、彼らはもっと騙し易い愚民の住む後進地帯を求めて、南仏からスペインへと流れて行ったのだと私は想像する。だが彼らがフラメンコ音楽や舞踊、まして数百年昔に流行った「ムーア風ダンス」をスペインに運んだ筈はない。神聖ローマ帝国皇帝シギスムンドから「キリスト教を信じるボヘミアの臣民」だというパスポートを貰ったため、しばしばボヘミアンと呼ばれた流浪の民ロマは、行く先々で御当地の俗曲を超絶技巧で飾り立てて演奏し、聴衆を喜ばせて金を稼いだ。ハンガリーではリストやブラームスが、その音楽を「ハンガリー音楽」だと誤解してクラシックの名曲を書いた。スペイン生まれのバイオリニスト作曲家サラサーテは流石に騙されず、ハンガリーのロマの流儀で作った自分の曲には、ドイツ語で「チゴイネルワイゼン（ロマの歌）」と名を付けた。スペインのロマが演奏するフラメンコ音楽、とりわけその根幹をなすソレア、アレグリア、シギリージャなどは、3/6 拍子と 3/4 拍子が交替する、紛う方なきイベリア土着のリズムを持っている。

流浪のロマは定住するロマを軽蔑して、自分たちの生き方が本物のロマの生き方だと誇った。芝浦の海で獲った魚でなくても「江戸前」があるように、「フラメンコ」はやがてフランドルとは関係なく、19 世紀の終りまでには「生粋のロマ風」だけを意味する言葉になっていたのだと思う。

メリメと同じ年に生まれ、ナポレオン戦役後の同じ頃にスペインを歩き回ったイギリスの物書きにジョージ・ボロウ (George Borrow, 1803-81) がいた。私が全集を通読した数少ない作家の一人で、彼の『未開のウェールズ』(*Wild Wales*, 1862) とウェールズ中世詩の英訳は、若き日の私をウェールズにのめり込ませる入門書になったし、彼が自らイギリスの 로마 に交じって生活し、その経験に基づいて書いた二編の風変わりな小説は、私を 로마 の世界に目覚めさせた。

メリメは大学出の言語学者だったが、ボロウは素人の博言学者だった。メリメが大方は政府お声がかりの視察旅行でスペインへ出掛けたのに対し、ボロウは聖書協会の一員としてスペインの貧民たちに聖書を配り歩いた。その顛末を記した『スペインの聖書』(*The Bible in Spain*, 1843) には、スペインに定住する 로마 の暮らしぶりも随所に描かれていて、街角で赤ん坊を頭上高く回転させながら放り上げ、受け止めて見せては見物料をせびる 로마 の母親に呆れたりしているが、フラメンコという言葉は出て来ない。

スペインの舞踊音楽として昔から有名なのはファンダンゴで、バイロンの『チャイルド・ハロルド』に言及があるし、モーツァルトの「フィガロの結婚」では、第三幕の終りにファンダンゴが踊られる。勝田保世さんがスペインを訪れた頃には、ウエルバのファンダンゴがフラメンコに採り入れられて大流行していたという。十九世紀の終りにカリブ海に行く船の甲板で、若い男がギターを弾いて歌うソレアを聴いたラフカディオ・ハーンは、それがフラメンコだったとは書いていない。定住 로마 も貢献して作り上げたアンダルシアの民謡が流浪の 로마 に取り上げられて、例えばセギディージャとシギリージャに聴かれるような、「アンダルシア民謡」と「フラメンコ」の間の微妙な似寄りと差異が生まれるのは、二十世紀も少し進んだ頃ではなかったかと思われる。

1970年代の二度の夏に私はアンダルシアをさすらった。マドリーから列車で赤褐色の高原を南へ下り、花盛りの夾竹桃に満たされた峡谷を幾つか越えてセビージャの駅に着くと、どこをどう歩いたか町の小さなプラサに出て、遊んでいた子供たちにこの近くにうんと安く泊まれる場所があるかと訊いた。子供たちは大騒ぎしながら私を「ロム旅籠」(*Hostal Rom*) と看板の出ている宿に引っ張って行った。殺風景な二階建てが四角なパティオを囲む怪しげな宿で、全身を黒衣に包んだ管理人の婆さんから、宿泊料前払いで宛てがわれた部屋は、パ

ティオに向かっては胸の高さの壁で仕切られているだけで、シャワーを浴びていても上半身が丸見えだった。夜になるとパティオには、追々と身なりの悪い男たちが集まって談笑しはじめ、私はかなり不安になって来たのだが、男たちの一人が仕切り越しに呼びかけて集まりに引き入れた。私には彼らの話すスペイン語が全く分からず、彼らは私がリングフォンで独習したスペイン語を可笑しがり、こいつは外国人だと見極めると、何か発酵乳らしい物をグラスに一杯飲ませた上で解放してくれた。

翌朝遅くすっかり人の気配の無くなったパティオに出て行くと、あの婆さんが二階から降りて来て、一音一音全く同じ長さで尻上がりに「ウテナパルテ」と言った。（“Usted no parte?”「あなたは発たないのか」）だと解るのに少し暇がなかったが、相手の発音の真似をして「エタノチェタンビエン」（“Esta noche tambien”「今夜も」のつもり）と言うと、にやりと薄笑いして消えた。私は管理人の老婆と泊まり客たちに、定住ロマと流浪ロマの生活の極微の一端を見た思いがした。プラサで遊んでいた子供たちは、日焼けした私の肌の色とみすばらしい身なりから、このあんちゃんはロマだと判断したに違いなかった。

姫路獨協大学で十数年働いた私は、日本ケルト学会の関西支部を姫路に置いて、何となくその世話役を勤める破目になった。学会の方針として、東京の大会では学術的な研究発表を、姫路の大会では啓蒙的なケルト紹介を中心にしようという事になったので、私は一般の参加者に面白がって貰えそうな出し物を色々と考えた。最も成功した二つは、イエイツの詩“Easter 1916”の朗読に付けたモダンダンスと、ジョイスの“Anna Livia Plurabell”による朗読と和太鼓と舞踊のトリオだったと思う。注釈して置くと、この当時の「ケルト学」は、ケルティック・リーグに加わっている六か国（スコットランド、マン島、ウェールズ、コンウオール、アイルランド、ブルターニュ）の事なら何をやっても良かったし、特にアイルランドからは、エンヤの歌声やリヴァーダンスの足音が、妖精じみた蠱惑を乗せて聞こえ始めていた。日本文体論学会とカレドニア学会にも引き摺り込まれていた私は、モリスにかかわっている暇が全く無かったが、この頃イギリスの古書通信販売のカatalogに、ジョン・フォレストの『モリス・ダンスの歴史』（John Forrest, *The History of Morris Dancing 1458-1750*）という本が出ているのに、何か里心に似た思いを掻き立てられ、取り寄せて研究室のスチールラックの上板に乗せたまま忘れてしまった。

姫路で働いた期間中、私は毎年英語の入試問題を作っていたが、2001年の入試で一か所の誤問を出してしまい、その事が地方の新聞に載った。気にすることはないと言ってくれる人が多かったが、私にしてみれば、教師という職人が職人仕事でへまをするのは焼きが回ったとしか言いようがなく、定年にはまだ間があるが、この一年で依願退職させて貰うことにした。退職後はしばらく、姫路の日仏協会設立の手伝いをしてフランス近代詩のサロンを受け持ち、ラマルティエヌからアポリネールまでの詩を講読したのだが、元々私はフランス語のrが発音出来ないので、朗読で受講者を泣かせる訳には行かなかった。ここから広がってマルチニークの政治家詩人エメ・セゼールを読み、ネグリチュード文学を知ったのは収穫だったが、ネグリチュード詩人たちの中には昔で言えば「ムーア人」がいることに、その時は思い至らなかった。フランス語を読むスピードが速くなったので、ジュヴァンヴィルの『ケルト文学研究』十二巻を通読し、余勢を駆ってスペイン語とイタリア語のケルト研究書を手当たり次第に読んだが、「ケルト」なるものの実体はお月様のように一歩進むごとに先へ逃げるので、結局私は日本ケルト学会から身を引いてしまった。

意地の悪い人には自慢にも取られそうな、益体もない身の上話は切り上げて、コロナ騒ぎが始まる少し前のある日のこと、遠い昔に研究室から引き揚げて我が家の廊下や押し入れに積み上げていた本を整理しているうちに、私はあの『モリス・ダンスの歴史』を再発見した。行方不明になっていた飼猫が突然帰って来たような気分で早速読み始めたのだが、ルネサンス期の文献からの引用がやたらに多くちりばめられていて、その手の英語から長く遠ざかっていた私はしばらく難儀させられた。文科系の学問でコンピューターが使われるようになった初期の業績で、モリスがいつ、どんな場所で踊られたかを綿密に調べ上げて分類整理して見せるが、昔の学者たちのように、そこから夢を紡いでヒストリー（物語）を織り上げることは努めて避けている。さらにはモリスを定義することさえ控え、モリスはカテゴリーではなく、ヴィトゲンシュタインが言う“open concept”なのだと言う。学生時代に教養課程の「哲学」を三度落第したことを誇る私には何の事だか解らない。何であろうと人がモリスだと言うものがモリスなのだと理解しておいた。

そういう事情だから、以下はフォレストの本に触発されながら、あちこちから都合の良い断片を拾い集めて私自身のヒストリーを作ると言う、学者にはあ

るまじき行為に耽ることになる。私は学者などではなく「ナンセンス・ドジャル」の教師なのだと開き直って「心に浮かぶよしなしごと」を、それでも書き留めておきたいと思う。

八世紀に始まったスペインのレコンキスタ（再征服：国土回復）が進行し、イスラム教徒の支配を受けなくなった各地域では、何かの祝い事がある度に、領主の肝煎りで、キリスト教徒が勝ってムーア人が逃げ走る戦いを模した偽闘の野外行事が催された。やがてこれは様式化されて行き、行事のなかの色々な役割も種々のギルドが分担して洗練し、十二世紀までには「ムーア人とキリスト教徒」（Moros y Cristianos）と呼ばれる、領主の館で上演する舞踊劇のジャンルが生み出されていた。館の外の民衆は、この舞踊劇の恐らく幾分下卑たヴァージョンを、縁日に繰り出す山車の上などに見て浮かれていた。ムーア人に扮した芸人たちは、高い跳躍やアクロバティックな動きの多い激しい踊りで観衆を興奮させ、効果を高めるために大きなナプキンを肩からひるがえし、足には幾つもの鈴を付けていた。この踊りがスペインを出て「ムーア風」（Moresca）という通称でフランスに入り、イタリアに広がった。時代は下るが1521年には、教皇レオ十世がサンタンジェロの中庭で、モレスカを躍る催しを開いた記録がある。これが小学館の『仏和大辞典』にある「ルネサンス期に大流行した」モレスカだと得心したが、「スペインのムーア人によってヨーロッパに輸入され」という説明は間違っているのだと思う。支配者だった本物のムーア人は、先祖の地アフリカへ逃げ帰っただろう。

ここからは完全に私の空想だが、イギリスにモレスカが入って来た時、ムーア人と戦ったことのないイギリス人は、踊りの中の異教徒をやっつける偽闘的な要素を、オリエントへの十字軍の戦いだと思い違えた。そしてイギリス人の記憶に新しい十字軍の英雄は獅子心王リチャードだった。バラッドの英雄ロビン・フッドの正体については諸説があるが、最も広く言われるハンティンドン伯爵フィッツウースなら獅子心王と時代はほぼ一致する。小説『アイヴァンホー』に、王位篡奪を狙う摂政ジョンが統治するイギリスで、ロビン・フッドが獅子心王に忠実な隠れ臣下として活躍するのは、あるいは作者ウォルター・スコットの独創だったかも知れない。だがもし王とロビンを結び付ける民間伝承が十二世紀近くまで遡るとすれば、異教徒征伐を締め括る面白可笑しい踊りにバラッドからの人物が出て来ることの説明がつく。メイド・メアリアンだの

フライア・タックだのが登場するイギリス独特の「モリス・ダンス」は、こうして生まれたのではないだろうか。

蛇足だが、モリスは男だけの踊りで、メイド・メアリアンも男が演じる。イギリスではシェイクスピア劇の時代になってさえ、オフィーリアもデズデモナーも男が扮した。

イギリスでは十六世紀のテューダー王朝時代にモリス・ダンスが盛んになった。百年戦争だの薔薇戦争だのが終って、人々が鼓腹撃壤できる時代が来たからには違いないが、テューダー王朝の君主たちの個性も幾分かは寄与したと思われる。

1485年にボズワースの戦いでヨーク家の王リチャードを破り、ランカスター家の王ヘンリー七世として即位したヘンリー・テューダーはウェールズ人だった。薔薇戦争が始まる少し前、イギリスの王位にあったランカスター家のヘンリー五世は、フランス王シャルル六世の娘カトリーヌを后にしていた。王が死ぬとカトリーヌはウェールズ出身の軍人オワイン・ティーディル（英語風に言えばオウエン・テューダー）と再婚し、二人の間に生まれたエドモンド・テューダーが、これも「曾祖母がランカスター公爵ジョンの後妻だった」マーガレットと結婚して生まれたヘンリー・テューダーは、ひどくうっすらとランカスター家の王位継承権を持っていた。薔薇戦争末期にはランカスター家の直流がすっかり殺されてしまい、とうとうヘンリーにお鉢が回って来たが、ヨーク家の王が権勢を誇るブリテン島にいたのでは身の安全がおぼつかなく、ヘンリーはウェールズに親近感の強いブルターニュに奔った。

不遇時代をフランスに亡命して過ごしたヘンリー七世は、大陸で本場の宮廷モレスカを見ただろうし、宮廷から流れ出して庶民の間に広がったモレスカにも触れる機会があっただろう。1501年にヘンリー王は、長子アーサーの後にスペインのカトリック両王の娘カタリーナを迎えて結婚式を行った。披露宴の余興には「仮装」と「モリスク」が含まれていた。ウェールズ人たるヘンリー王には、この目出度い式には格別の意味があり、ブリテンの地に現実のアーサー王が現れて黄金の世紀が始まることを王は夢見ていた。だがアーサーは王座に就くことなく夭折し、カタリーナは弟のヘンリー（八世）と再婚させられる。

1509年に即位したヘンリー八世はスケールの大きい人物で、イギリスの歴

史に際立った足跡を残した。その人柄が俚べそうな、王自身が英語で書いた「良き仲間との暇潰し」(“Pastime with Good Company”)という三節の詩があって、グイン・ウィリアムズ編の『ウェールズ詩紹介』(Gwyn Williams, *Presenting Welsh Poetry*, 1959)に載っている。第一節では、自分は死ぬまで良き仲間との暇潰しを愛し、その暇潰しには狩りと歌とダンスが良いと言う。王が楽器を弾いて歌ったことは知られているから、このダンスも自分が踊ったのだと思う。第二節だけ和訳してみる。

若いうちにはいちゃつくも良い。
良かれ悪しかれ遊ばにゃならぬ。
思想空想みな呑み込んで
消化するには仲間が一番。
怠け心は
全ての罪の
いろ女。
遊び遊ぶが
至高の善と
皆が言う。

OED も引かない思いつきの和訳だから全く自信はないのだが、出典の本を持っている人が今の日本にいないだろうから文句はつくまいと高を括って掲げておく。第三節では仲間には良いのも悪いのもいるけれど、良いのに従い悪いのは避けて、自分は自分を活かすのだと歌う。

こういう王だから、カトリックの信仰厚く気位の高い、英語があまり流暢でなく、それにも増して王の日常語であるウェールズ語など片言隻句も解しない后カタリーナに愛想を尽かし、美女ではないが蠱惑的な官女アン・ボレイン（普通はアン・ブーリンだが、ヨーマン衛士の制服を着たロンドン塔の案内人が気取ってこう発音するのが、私は気に入っている）と「いちゃつく」のも無理でなく、彼女と結婚するために后を離婚するのに反対したローマ教皇に後足で砂をかけ、イギリス国教会を創めたのも当然の成り行きだった。

国教会の坊さんたちのプロテスタントぶりが強くなるまでは、イギリスの民間では異教ケルトの名残を残す季節祭が生き生きと祝われていたが、とりわけ

冬至祭りには羽目を外した乱痴気騒ぎが許されていた。こういう催しの中に宮廷モリスのつまみ食いが持ち込まれ、1507年には民間でモリスが始まったという記録がある。それが芸人の踊りを「見る」モリスだったのか、人々が参加して「踊る」モリスだったのかは、今の私には解らない。

ヘンリー八世の死後、「血みどろメアリー」女王のカトリック復帰を挟んで、エリザベス一世女王がイギリスを繁栄に導く。だが国の首長と宗旨がどう変わろうと、地方の教区牧師の首が飛ぶことは殆ど無い。私は1945年の夏休みが明けた時、休み前に特攻精神を説いた同じ国民学校の校長先生が民主主義について講話したのを憶えている。イギリス民謡「ブレイの牧師」(“The Vicar of Bray” あまり古い物ではない)が折り返しで

私がこの世を去る日まで
守る掟はただ一つ
王様誰に変わろうと
ブレイの牧師はこの私。

と歌うように、この時代でも地方の教区牧師たちは、ことさら保身を考えてという訳でもなく、ただ世の中が変わったのだからと宗旨をこころろ変えながら「教会エール」(“ale”はビールだが、ビールを飲んで浮かれ騒ぐ集まりのことと言う)を催して金儲けを計り、人集めのために「見る」モリスの一座を呼んだ。モリスは大抵が恋と求婚をテーマにした祝婚の踊りだった。当時の人々が参加して「踊る」ダンスの主流は、男女のペアが輪になって進むカントリー・ダンスだったが、これにモリスが取り込まれて庶民のモリス・ダンスの源流になった。付け足して言うと、男女が直線の二列になって向き合う形のカントリー・ダンスは、清教徒革命後の新機軸だった。

芝居が宮廷の広間と縁日の山車の上でなく、劇場の舞台で演じられるようになった後も、演劇とショーとバレエはまだ未分化で、大団円は賑やかな踊り、特にモリスになることが多かった。エリザベス一世女王時代に演劇が演劇として未曾有の発達を見せた時、シェイクスピアと同時代にアンソニー・マンディ(Anthony Munday, 1513-1633)という物書きがいて、『ケントのジョンとカンブリアのジョン』(John a Kent and John a Cumber)という劇を書き、初演の日時

は残らないが、筋の進行に組み入れてモリスが踊られる最初の劇だったとされる。私は勿論この劇を見たことはないし、台本を読んだ訳でもないのだが、フォレストの解説によると、ジョンという名前の二人の「賢人」が、本物の賢人はどちらかを決める公開の対決をして、ケントのジョンが勝つという筋書きだったらしい。エリザベス朝時代の「賢人」は、ジョン・ディーやロバート・フラッドに有名な実例が見られるように、哲学者と錬金術師と魔術師を兼ねるのが常だった。

ここでまた私の空想だが、マンディより一世紀少々前にショーン・ケント (Sion Cent, fl.1430) というウェールズ詩人がいて、哲学的で教訓的な詩を書いた。この名前は「ケントのジョン」という意味で、先祖がイングランドのケントから移住して来たための呼び名だと考えられている。古文書には英語の John Kent, John Kents, John a Kent, John a Kents などの形でウェールズの至る所に散在する名前なので、詩人の生地や生年すら特定出来ず、経歴が全く判らない。想うに詩人ショーン・ケントはジョン・ディー型の人物で、博学多才の「賢人」としての誉れが高く、真偽の混ざった賢人伝説が広まっていたのではないだろうか。そしてその人物に花を持たせる劇を書くのは、ウェールズ女王に捧げるオマージュだったのではないだろうか。マンディは劇の登場人物の一人にウェールズ語の歌を歌わせている。上にも触れたがテューダー家の王たちはウェールズ語が日常語で、エリザベス一世も国家の機密をウェールズ出身の腹心たちとウェールズ語で談義していた。

十六世紀末から十七世紀初めにかけて、イングランドの中でもウェールズに近いヘレフォードシャーとシュロップシャーでは、モリスがカントリー・ダンスと融合して、リボンや鈴を使う民衆のダンスがモリスと呼ばれるようになっていた。清教徒革命時代には、政府は多分国内外の戦争に忙しくて、演劇の中でモリスが出て来るのを検閲したり禁じたりするまでには至らなかったが、流石に教会エールが消滅した。それでも地方の富裕層は祝い事などにかこつけて世俗のエールを催し、これを狙って地方を巡業する「田舎モリス」("Rural Morris") のチームが現れた。メンバーには普通メイド・メアリアン役とヴァイス(悪徳)役、他に四人の踊り子とフィドル弾きがいた。やがてそれぞれのチームでモリスは家伝化し、自流を誇る複数のチームの間で競演が行われることもあった。これは勿論「見る」モリスだが、民衆のカントリー・ダンスに一層の

影響を与えないではおかなかった。「田舎モリス」は磨きがかかって 十七世紀中葉には、今日の辞書の定義にあるような、古典的なモリスの姿が出来上がった。そこではメイド・メアリアンやフライア・タック、道化といった人物の他に、小道具として鈴とナプキンとホビーホースが欠かせなかった。ホビーホースは張り子の馬の首から後ろが木の棒で、その先に小さな車の付いたものだが、昔のイギリスの芝居では騎士などが舞台上に登場する時に、日本の芝居のように二人がかりで四本足の馬を作るのではなく、これを引っ提げて乗馬していることを表した。私の幼い頃の四国では、古ぼけた阿波人形に身振りをさせながら門付けに廻る旅芸人がいたが、ホビーホースも門付けに使われて人々に親しまれ、やがて男の子専用の玩具になった。

フォレストによれば十七世紀末に向かうと、イギリスではダンスの機会が激減したという。その原因として私の頭に浮かぶ事柄は、クロムウェルの厳格さ、その死後の内紛、オランダとの度重なる戦争、ロンドンの大火、名誉革命後の内戦など色々あるが、政治史や社会史に詳しくない私には、尤もらしいことが言えない。

度重なる内戦で世襲貴族が没落する一方、十五世紀末から始まった共有地の「囲い込み」(enclosure)で緩やかに力をつけた農村の大地主は、十八世紀の初めには、国の政治状況がどうであろうと実質的に地方を支配する新しい勢力になっていた。地主は小作人たちのためにエールを催し、自家の祝い事に小作人たちを招待し、村の祭りに寄進して、そういう機会に「田舎モリス」を呼んだが、小作人たちもカントリー・ダンスのモリスを踊った。特にメイポール祭では民衆の「踊る」モリスが主役になり、メイド・メアリアンは「五月の女王」(May Queen)に同化された。

1712年にはドルアリー・レーンのプログラムに「最新のモリス・ダンス」が載っている。ジョン・ゲイとペイプの『乞食オペラ』が大成功するような、庶民の好みが日向に出る世紀が来て、モリスは最盛期を迎えることになった。

古い『オクスフォード英文学案内』(*The Oxford Companion to English Literature*)で「モリス・ダンス」を見てみると、普通の辞書にもある説明の後に「レヴズビー劇」("The Revesby Play")の項も見ると指示がある。そこを読むと十八世紀の終り頃、リンカンシャーのレヴズビーでモリス・ダンサーが演じた一種の民話劇だと知れるが、梗概は全く訳が解らない。主役の「道化」(Fool)には

四人の息子があり、その他に「スパイスだらけ」(Allspice)という男とその娘がいる。「道化」が竜とホビーホースを相手に戦うと、息子らは父を殺すことに決める。「道化」は跪き、ダンサーたち全員の剣で殺されるが、長男の「塩漬ニシン」(Pickle Herring)に蘇生させられる。剣の舞があり、「道化」と息子らは「スパイスだらけ」の娘に求婚する。これを『英文学案内』は「疑いもなく古い年の死と春の再生を象徴する」ものだと言う。

あるいはその通りかも知れないと私に思わせるのは、父親を蘇生させる息子が「ニシン」の付く名を持っていることで、昔のイギリスの中等教育程度の音楽教科書に「ニシンの頭をどうしよう」(“What Will I Do With My Herring Head”)という古い民謡があった。和訳して掲げておく。

ニシンの頭をどうしよう？

ニシンの頭をどうしよう？

それでたくさんパン作ろ。

ニシンの頭でパンかいな？

そうよその他いろいろと。

海の魚のそのうちで

ニシンが私にゃ一番よ

それで皆さんどう思う？

ニシンの上手な使い方？

ニシンの目玉をどうしよう？

ニシンの目玉をどうしよう？

それでプディングとパイ作ろ。

ニシンの目玉でパイかいな？

そうよその他いろいろと。(以下略)

ニシンの鰓をどうしよう？ (bis)

それで小窓の枠作ろ。(以下略)

ニシンの背中をどうしよう？ (bis)

それで釣りする舟作ろ。(以下略)

モリス・ダンスをめぐって

ニシンの鰭をどうしよう？ (bis)

それで針やらピン作ろ。(以下略)

ニシンの尻尾をどうしよう？ (bis)

それでエールの樽作ろ。(以下略)

民俗音楽研究の権威だったロイド (Albert Lancaster Lloyd, 1908-82) の考えでは、この歌は遠い昔には、自然の力の復活を願う、人身御供その他の供儀を伴う農耕祭祀と関わりがあった。祭りで犠牲にされる「祭祀王」が、やがて象徴的な「鳥の王」としてのミソサザイや「魚の王」としてのニシンなどで代用されるようになり、儀式で歌われた神聖な祝詞も、寄合で騒いで歌う他愛もない戯れ唄に変容して、かつては天地創造を寿ぐ呪術的な目録だったものが、滑稽で超現実なカタログになってしまったのだ、とロイドは説明する。『金枝篇』(The Golden Bough by J.G.Frazer, 1854-1941) が崇拝された時代の、おどろおどろしい御託宣をまともに信じるつもりは毛頭無いが、この歌を『レヴズビー劇』と突き合わせて考えると、やはり何か通底する神秘を感じてしまう。だがそれはモリスとは別物だろう。

十九世紀以降のイギリスで、モリスが何処でどれ程どのように踊られたかは、フォレストの本が扱う範囲でないので私には解らない。手に入る古い辞書類には、どれも同じような定義を付けて載っているの、滅びはしないが進化もしなかったと思われる。だが二十世紀に入るまでには、モリスがメイポール祭以外で目を引くことは殆ど無くなっていた。十八世紀から十九世紀の間には世の中の雰囲気が変わって来て、イギリスの詩を読んでも、ブレイクやバーンズには作者がモリスを踊っておかしくない所があるが、ワーズワースやコールリッジには全く似合わない。まして裸に鈴をつけたテニスやマッシュ・アーノルドなど想像するだけで不謹慎に思える。『乞食オペラ』に熱中した大衆は「啓蒙」されてお高くなったのだろうか。「科学」が進んで生活がより平均化され、常識的になったのだろうか。『乞食オペラ』の後に来るのはイギリス独特の「ライト・オペラ」の流れで、その果てには十九世紀末の「サヴォイ・オペラ」の、センチメンタリズムと皮肉とおふざけと道徳と愛国心を見事に捏ね合わせた火花がはじけた。

ウェールズでは、古い民俗行事の楽しみ事が消えたのは総てメソディストが始めた信仰復興運動のせいにされるが、イングランドにも通用するのだろうか。

二十世紀の初めに、民俗音楽の蒐集家・研究者としてあまりにも有名なセシル・シャープ (Cecil Sharp, 1859-1924) が、モリス・ダンスの実演者と面談して得た情報を整理した。それによると所謂モリス・ダンスは、定まった形式を持つ儀式的な踊りであり、熟練を要する勇壮華麗な、男だけで踊る玄人のダンスということだった。それに対してモリスと呼ばれるカントリー・ダンスは、くだけた社交的な踊りで、熟練の要らない、男女が互いに相手を替えるダンスだった。

情報提供者は十九世紀のモリス・チーム一員だった老人で、もう現役ではなかった。

そういうことであってみれば、二十世紀の暮れ方のイギリスで「メイポール祭でモリスを踊るんです」と私に言った若者は、ロマン主義のなれの果てのナショナリズムが最後の盛り上がりを見せた時代の、民族 (ネーション) の古俗復興運動に関わっていたのかも知れない。「民族」をあまり声高に騒ぎ立てると不穏な空気になり、民族臭や民俗臭など微塵もないブレイキンが世界を席捲するこの頃、あの青年も歳をとり、もうモリスを踊ってはいないだろう。玄人のだろうと素人のだろうと、私がモリスを見る機会はもう来ないに違いない。

獨協大学英語学科松本ゼミの最初のゼミ生たちも、あの名優 S 君を含め、とくに後期高齢者になっている。S 君は姫路の拙宅から遥か離れた千葉県に住んでいるのだが、過日久々に電話をくれ、諸種の事情でもう会えないかも知れないという含みの言葉を聴かされた。卒寿の近い私に、踝に鈴をつけて踊るダンスへの、今も続く好奇心の種を蒔いてくれた S 君に、ただ有難うを言いたくてこの文章を書いた。こんな代物を大学の紀要に「研究ノート」として寄稿するのは場違いと謗られて当然だが、心情お汲りの上何卒御諒恕を。